書評

都出比呂志著『前方後円墳と社会』

下垣仁志

一

「前方後円墳体制」「初期国家」。賛否両論を呼びつつ、今や学界に広く知れわたっているこれらのキーワードを軸として、九〇年代の古墳時代研究を牽引してきた著者が、その成果に都市論や墳墓論などをくわえた「研究の総まとめ」を、このたび上梓された。病による研究の中断（本書「あとがき」参照）を乗り越え、著者渾身の本書が刊行されたことに、心からの喜びを表したい。同時にまた、総合性と体系性を併有する本書を範として、狭隘浅薄あるいは宏大雑駁の二極化に陥りがちな近年の古墳時代研究が、少しでも進展をみることを希いたい。

八〇〇頁に迫る浩瀚な本書の全容をまとめることも、著者の長年の研究蓄積と多彩な論点にあふれた各章の内容を細大漏らさず抽出することも、菲才の評者には至難である。したがって、まず各章の要旨と簡単な解説を提示し、そののち全体をつうじた批評へと論を進めてゆく手順をとることにする。その際、複数の章で重複する論点は、最小限とりあげるにとどめる。古代社会の体系的把握に努めてきた著者の議論に対し、枝葉の批評を試みてもその肯綮には中らぬから、なるべく大枠に即した批評を心がけたい。

二

本書は、六部二五章からなる。各部では、それぞれ一書を要するほど宏大かつ重大なテーマがあつかわれており、それらを一冊に凝縮した本書は、実に贅沢な書物といえよう。

本書の構成は以下のとおりである。各章には若干の改稿がほどこされているものの、基本的に再録である。なお、括弧内に各章の初出年次を付記しておく。

序章　国家形成過程について（新稿）

第一部　初期国家論について　第一章　日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——（一九九一年）／第二章　国家形成の諸段階——首長制・初期国家・成熟国家——（一九九六年）／第三章　前方後円墳体制と民族形成（一九九三年）／第四章　墳丘墓の比較考古学——異なる墳丘型式の意味——（一九九九年）

第二部　都市論について　第五章　都市の形成と戦争（一九九七年）／第六章　弥生環濠集落は都市にあらず（一九九八年）／第七章　世界の城塞的集落と都市（一九九五年）

第三部　墳墓の構造　第八章　墳墓と葬法（一九八六年）／第九章　墳丘の型式（一九九二年）

第四部　前期古墳論　第一〇章　前方後円墳の誕生（一九八九年）

／第一一章 祖霊祭式の政治性――前方後円墳分布圏の解釈――（一九九五年）／第一二章 前方後円墳体制と地域権力（一九九五年）／第一三章 竪穴式石室の地域性の研究（一九八六年）／第一四章 埴輪編年と前期古墳の新古（一九八一年）／第一五章 前期古墳の新古と年代論（一九八二年）／第一六章 前方後円墳の成立と辰砂の採掘（一九九七年）

第五部 首長系譜論 第一七章 首長系譜変動パターン論序説（一九九九年）／第一八章 古墳時代首長系譜の継続と断絶（一九八八年）／第一九章 古墳時代の方格設計（一九八九年）／第二〇章 古墳時代首長の政治拠点（一九九三年）

第六部 考古学と社会 第二一章 日本考古学と社会（一九八六年）／第二二章 森本六爾論（一九八八年）／第二三章 小林行雄論（二〇〇三年）／第二四章 歴史学と深層概念――日本文化の歴史的分析の手続き――（一九八九年）

大きくまとめれば、第一部・第二部では、法則的事象と個別的事象の往還をつうじて相互の深化を目指す比較考古学（後述）の視座から国家・墳墓・都市などをとらえ、第三部～第五部では、古墳時代の個別的事象の具体的解明に意を注ぎ、そして最終の第六部では、それらを追究する研究者の立脚点と社会とのつながりを反省的にとらえ返すという構成になっている。

三

序章は新稿で、第六部をのぞく本書の梗概と近年の研究に対するコメントが提示される。

第一部「初期国家について」は、初期国家論を軸としつつ、民族形成・国家形成・前方後円墳体制・比較考古学など、著者の主要テーマに関する代表的論考四本が収められる。

第一章は、本書の根幹をなす総括的な章であり、生半可な要約をはねつける濃密さがある。本書の通読後に、序章とあわせ再読することを勧めるが、あえてまとめると次のようになる。まず理論面で、新進化主義と初期国家論の成果に照らし、エンゲルス学説に立脚する従来の日本国家形成論の不備を衝きつつ、階級分化と身分制、租税と徭役、支配組織と人民編成、物資流通の広域掌握を国家形成の指標とみなし、それらの成熟過程を長期的にとらえる必要性を強調する。その上で、考古資料を駆使してそれらを検討してゆく。まず三世紀に、集落と墓制に階層分解が生じることをとりあげ、租税を示唆する大型倉庫群と徭役を推定させる巨大古墳などの存在を加味して、これらを階級分化とみなす。次いで、古墳における墳形や規模の差に、身分制的秩序の存在を推定し、武器類から推測される軍事編成や巨大倉庫群および地域計画の運営の背景に、支配組織と人民編成の整備をみる。さらに、鉄・須恵器などの流通状況から、政治権力の形成維持と必需物資流通機構の掌握との密接な関係を確認する。以上より、これらの指標が認められる三世紀半ば以降の古墳時代を、国家成立段階と結論づけるのである。そして、必需物資の安定的供給などのために連合した上層の諸首長から、下層の一般成員まで身分関係が細分化された当該期の政治的秩序を、もっとも顕示的な象徴物にちなんで、前方後円墳体制と呼ぶことを提唱する。

前章を承け、第二章では初期国家論の理論的・実証的整備が目

指される。五つの具体的指標をあげ、首長制→初期国家→成熟国家という国家形成の長期過程を描きだし、これを日本列島中央部に適用し、古墳時代が初期国家であることを再確認する。また、ほんらい文化人類学の社会進化の一段階を指す首長制が、日本古代史学界の一部で異なる意味が付与された経緯を明らかにし、それによる混乱の是正を求め、さらには本州中央部のみならず北海道および琉球諸島をもふくめて日本列島全体の国家形成を総合的に論じる必要性を説くなど、重要な指摘がなされている。

第三章では、前方後円墳体制の成立が列島中央部の民族形成を基礎づけたことが説かれる。まず、畿内を核として前方後円墳や必需物資や威信財が広域的に分布することから、前方後円墳体制に組みこまれた範囲が列島中央部（九州南部～東北中部）であったことが明示される。一方、当該期に、民族の存在を示唆する生活様式および精神習俗の共通圏が、この範囲に形成されたことが、多様な資料から裏づけられる。そして、この二事象の空間的・時間的な関連性から、前方後円墳体制の成立と民族形成の関連性が導きだされてゆく。

第四章では、「比較考古学」の視座から墳丘墓を検討する。比較考古学とはやや耳慣れぬ用語であるが、「異なる地域や時代に起きた現象の比較を重視する考古学①」のことであり、この視座に本書の前半は貫かれている。異なる墳丘型式が併存する日本の古墳の特異なあり方を、ヨーロッパ北部および中国の墳丘墓のあり方と比較することをつうじ、前者の登場・造営背景を浮かびあがらせるとともに、前者の検討で錬磨されてきた集団表象の手段としての墳形・墓室の型式という視点を、後者の解釈に適用することを提言する。

第二部「都市論について」には、都市の定義と機能、その出現過程などを論じた三章を設けている。内容の重複を勘案し、第五～第七章を一括してあつかいたい。本部の要点は、おおむね三点に収斂させうる。第一は、都市の定義である。章ごとに若干のブレがあるが、おおよそ中心機能・高密度集住・外部依存（・商工業の発達）が認められる集住の場と定義づけられる。また、権力の存在を都市形成の必要条件とみず、都市形成により階級関係が醸成されてゆく側面もあるとの指摘は、国家形成論との接合点を確保しうる点で非常に重要である。

第二は、日本列島における都市形成プロセスの究明である。都市とみなされることもある弥生環濠集落を先の定義に照らし、都市的な要素を萌芽的にもちつつも弥生時代末期に解体したと主張する。さらに、古墳時代の権力中枢である首長居館は、弥生巨大環濠集落の中心機能を継承しつつも、商工業機能は市や工房として首長の領域内に分散し、高密度集住も起きず、日本列島では藤原京まで都市が成立しなかったことを明快に論じる。

そして第三は、都市形成の比較考古学的検討である。従来の都市／農村の二項対立から脱却すべきことを提案し、都市と農村の中間的性格をもつ第三の類型である「城塞集落」が、都市出現前の集団間の緊張時に世界各地で共通して出現することから、弥生環濠集落もこの農村→城塞集落→都市の変遷プロセスにおいてとらえるべきことを提言する。

これらの要点が交響して奏でられる都市論は、著者の研究をさらに拡幅する可能性に満ちている。すなわち、『日本農耕社会の

成立過程』[2]で明らかにされた古代農村構造論と都市論を総合し、都市形成と国家形成の同軌性を比較考古学的に追究することで、著者の集落論および国家論はより高次のレヴェルで展開されえよう。ただ、本部の議論はやや断片的であり、体系的な完成は果たされていないとみるべきかもしれない。

第三部「墳墓の構造」は、日本列島の墳墓を対象とする二章からなる。ただ評者は、第四章を本部にふくめて、第一部～第三部をそれぞれ比較考古学的視点にもとづく初期国家論・都市論・墳墓論とした方が、本書の結構が鮮明になったのではないかと感じる。まず第八章では、縄文時代から鎌倉時代までの多様な墳墓を、構成要素・葬法・葬送儀礼・共同墓地の構造・墓地の階層性に重点をおき、長期的かつ多角的に論じる。研究対象が細分化した現今にあって、墳墓の大要をおさえた本章は、墳墓研究を志す者が常に立ち帰るべき貴重な成果である。巨大前方後円墳を頂点とする階層構造の中で古墳をとらえるなど、のちに前方後円墳体制論に結晶する見解が萌芽的に提示されているのも重要である。

第九章では、多元的な系譜をもつ東アジアの墳丘墓との関係に留意しつつ、日本列島における前方後円墳の成立から終焉までを、その墳丘形態や築造原理などから追跡する。本書では手薄な、五世紀以降の前方後円墳体制の状況も説かれていて有益である。

埋葬施設・墳丘構造・埴輪・物資流通など多様な資料から前方後円墳体制の具体像に迫るのが、第四部「前期古墳論」である。全七章からなり、頁数・章数ともに本書の三分の一を占める。

まず第一〇章では、前方後円墳（体制）の成立経緯が論じられる。弥生墳丘墓から前方後円墳が醸成されてゆく過程を丹念にたどる一方で、後者の誕生時点の飛躍において、後円部の三段築成原理・北頭位埋葬・密封埋葬原理・水銀朱の重視（第一六章）など、中国思想との交流が大きな役割を果たしたことを強調する。

冒頭で記したように、前方後円墳体制論には批判もあるが、それに対するリプライと自説の補強が、続く二つの章でなされる。第一一章では、前方後円墳の分布を政治圏とみなす著者ら従来の見解への批判を受け、その論理基盤が文献史学の成果に暗に明に依拠していたことを、具体的な証拠を揃え承認しつつも、そうした方法自体を棄却するのではなく、文献史学の成果と照らしあわせて考古学から政治圏を議論する方法論を錬磨すべきことを提言する。さらに、祖霊祭式が本来的に政治性を帯びやすいとの前提を立て、弥生墳墓の質的変化によって生じた前方後円墳が広域拡散し、前方後円墳体制下で墳墓祭式の諸要素が諸地域で厳密な選択を経て受容される背景に、政治性が介在していたと論理づける。

第一二章では、地域単位の自律性を説く地域国家論への批判をつうじ、前方後円墳体制論の論理補強がなされる。まず、前方後円墳体制を「古墳の墳形と規模との二重規定によるランキングの差」により「首長の系譜と実力の違いを相互承認する」政治秩序と明快に定義づけ（三九九頁）、この秩序下における必需物資および威信財の流通機構を畿内地域の有力首長が掌握していたことを明示する。その上で、居館や土木事業などの実態から地域権力の存在を認めつつも、それらは経済面などから自立しえず、自身の権力を維持するためには畿内と吉備を核とする政治センターへの求心性をもたざるをえなかったと結論づける。物資流通と広域権力（あるいは国家）形成の連動性を説く著者の主張（第一章～

第三章）が、簡明かつ適確に示された好章である。

第一三章では、長大型竪穴式石室の平面形態や埋葬頭位の堅実かつ広範な分析にもとづき、一定の画一性をもった前方後円墳祭式の成立後も地域的個性が併存することを摘出し、それら祭式の諸地域における受容形態の差異の中に、首長間の政治的交流の具体像を探ろうと試みる。斉一性と地域性の併存を当該期の首長間関係の特質とみる本章の見方は、著者の前方後円墳体制を中央による諸地域の一元支配とみる一部の研究者の理解が誤解にすぎないことを、端的に教えてくれる。

本書のように、考古資料から社会関係に肉迫するためには、精確な編年が不可欠となるが、第一四章および第一五章ではその検討がなされる。示唆に富む指摘も多いが、原論文の初出から二〇年あまりを経た今となっては、いささか古さびた感は否めない。

第五部「首長系譜論」では、諸地域首長の実態に焦点をあて、その消長および政権中枢との密接な関係性を奥津城たる首長（墓）系譜から、その政治的・経済的基盤を生前の拠点たる首長居館から、それぞれ説き明かしてゆく。居館を核とする政治的拠点を緻密に検討することで、古墳の分析だけでは漏れ落ちかねない首長の在地的実力を明らかにしえており、表層的かつ観念的に流れがちなあまたの政治社会論と一線を画する実証性と重厚さを、本書は確保しえている。

前半の第一七章および第一八章では、首長系譜の詳細な分析にもとづき、諸地域首長の消長を具体的に証示する。まず、著者が長年フィールドとしてきた京都府桂川右岸地域の首長系譜の変動を丹念に追跡し、それが中央をふくむ諸地域の変動と軌を一にすることから、この現象は、従来の有力見解である部族最高首長権の輪番制や大王権力による地域首長への直接的規制ではなく、中央と諸地域とが連動しあった激しい主導権争いの権力闘争を反映していると主張する。さらに、これらの変動のパターン分類をつうじ、この権力闘争において中央と諸地域首長がいかに関与しあっていたのかの実証的把握が可能であるとの構想が披瀝される。

本部の後半では、古墳時代の政治拠点が検討の俎上にのせられる。第一九章では、方格設計を有する建物配置が普遍的に存在し、それらが近辺の古墳や水田などと有機的関連をもって配置されている事例があることから、五～六世紀には、首長の根拠地において政治的地域計画としての方格地割が実施されていたとの見通しが述べられる。

第二〇章では、まず方格設計の存在を首長居館の条件とみなす見解を批判し、生計維持の最低要件をこえる政治的・経済的機能が備わっていることが、首長居館のより本質的な条件であると主張する。そして、首長居館に顕著な大型高床倉庫群などの検討をつうじて、首長の政治拠点をランク差をもった三類型に分類する。その結果、政権中枢と諸地域首長の格差、そして諸地域首長と中間層・一般層の格差という、古墳において摘出された格差が、生前の拠点である居館の格差と対応することが示唆される。

町おこしや発掘調査などをつうじて地域社会と深くかかわる考古学は、他の諸学問分野にもまして社会と密接不離のつながりをもつ。この観点は近年、現代社会と考古学との関係を自覚的に主題化するパブリック・アーケオロジーとして、ますます重視されつつある。第六部「考古学と社会」には、考古学と社会との関係

を真摯に問い続けてきた著者の見解を凝縮した四本の論考が収録されている。こうしたテーマは、ともすれば余技的な研究とみなされることもあるが、一書の中で独立した部が与えられているところに、著者の強い意志と自信が察せられる。ただ独立させている反面、民族論をのぞくと第一部～第五部の議論と遊離してしまっており、相互のフィードバックが果たされていない憾みもある。

第二一章では、日本における考古学者と社会との関係、および学説と社会環境との関係を、明治期から現在までを射程に収めて論じる。論文テーマの変遷と同時代の社会動向との関連性をグラフを駆使して明示する方法は、ユニークかつ先駆的な試みである。

第二二章および第二三章では、弥生・古墳時代研究において決定的な役割を果たした森本六爾と小林行雄の学史上の位置づけをはかると同時に、当該期の社会構成に関する彼らの方法論がいかにして組みあげられたかを、その生きた時代と重ねあわせつつ説き示す。

第二一章でも論じられた、近年の歴史根源的な日本文化論および日本民族論に対し、その基底に横たわる「深層」概念への批判的吟味を経て、その方法論的深化の必要性を説くのが、最終章の第二四章である。深層／表層の二層分析に陥りがちな民俗学や民族学に対し、時間軸を分析にもちこめる考古学では多層分析が可能になることを強調し、さらに、単一文化論と結びつきがちな日本民族論を考古資料による分析から棄却し、多元的文化論の立場から多層的に追究すべきことを提唱する。諸学問の連繋の重要性を説く著者の姿勢が、適切な事例によりもっとも明瞭にあらわれている章である。

四

以上、本書の内容をできる限り伝えるべく、各章の内容を逐一まとめてきた。以下では、本書全体をつうじた批評を、紙幅の制限内で手短におこないたい。

本書の理論的特色は、エンゲルス・マルクスの国家形成の論理を批判的に継承しつつ、新進化主義的な、そして比較考古学的な立場をとっていることである。著者の研究履歴をいささか乱暴にトレースすれば、マルクスに依拠した弥生時代の共同体論から出発し[3]、『日本農耕社会の成立過程』における、小経営先行という独自の観点にもとづく共同体論を経て、本書の新進化主義的、そして比較考古学的な国家論・都市論にいたったといえる。ただそれは、闇雲なスタンスの転轍では決してない。エンゲルス学説の骨格を残しつつこれに実証主義的な改良をほどこした新進化主義的な初期国家論を採用していることや、また小経営形態が異なれば階級関係形成の道筋も異なるという、エンゲルス学説批判より提示された見解から必然的に導出される、国家形成・都市形成の軌道の複数性という観点が、異地域・異時代の比較考古学へと著者を向かわせていることが示すように、一貫してエンゲルス学説との知的格闘の中から、著者の理論は紡ぎだされているのである。エンゲルス学説にさほどの興味も魅力も覚えない、評者をふくむ若い世代は、ともすればこうした著者の知的格闘を踏まえず初期国家論や都市論の上澄みを掬いかねないので、自戒の意もこめてこの点を確認しておきたい。

また、中間的・過渡的な項を意識的に設定することで、二項対

立で膠着した議論からの脱却をはかっていることも、本書を特徴づけるスタンスである。たとえば、国家／非国家の二項対立に対しては、過渡的段階である初期国家を設定して首長制社会→初期国家→成熟国家の三項変遷でとらえ（第二章）、都市／農村の二項対比に対しては、中間に城塞集落なる類型を設定し（第六章）、首長層／一般層の間には中間層を設け（第一章）、そして二層対比の文化論に対し多層分析の重要性を説く（第二四章）など、本書のいたるところでこのスタンスが貫かれる。無論、項数を増やすだけでは、原理的にX項対立から逃れられない。著者は、中間的・過渡的な項の設定により項間の関係を浮かびあがらせるとともに、項の類型的把握をつうじ比較考古学的な項内／項間の理解の深化を目指すことで、X項対立からのひとまずの回避をはかっているようである。根本的な回避にはなっていないものの、資料の実態に即した仮設概念の設定という点で、このスタンスにはとりあえず同意できる。

二項対立による議論の萎縮から脱却をはかる志向は、本書を彩る強い総合志向と通底しているように思う。たとえば本書では、政治的緊張や流通システムの様態から古代国家形成と古代都市形成とが関連づけられる（第六章等）。本書では踏みこんだ議論はなされていないものの、本書の都市論を媒介として、国家形成論と『日本農耕社会の成立過程』で追究された農村構造論との総合化が可能と思われる。また居館と古墳（第一〇章）、あるいは生活様式の共有圏（第三章）と前方後円墳体制の被覆範域とが結びつけられる。墳墓といういわば死の領域を無批判に生の領域と直結する研究が多い中、居館や生活様式といった生の領域を踏まえて総合的な議論が構築されている点は、きわめて重要である。また、日本列島内における諸側面の総合だけでなく、比較考古学をつうじて世界諸地域の初期国家や都市や王陵を幅広くとらえようとし、さらには考古学データの総合にとどまらず、諸学問分野の相互協力を繰り返し強調していることにも、著者の総合志向が明瞭にあらわれている。こうした著者のスタンスが、本書の外部へと開かれた感じと議論の奥行きを醸しだしているのであろう。

五

上掲した本書のスタンスには、おおむね共感を覚える。しかし一方で、いくつかの疑問も感じた。以下では、些末な批判は避け、本書のスタンスにかかわる疑問点を指摘したい。

まず第一に、中間的・過渡的な項を積極的に設定し、そして長期過程を重視するために、変化や画期が不鮮明になっている感がある。たしかに、国家にかなり近づいた過渡的な段階として初期国家を設定することで、国家形成への道筋は明瞭になろう。だがそのため、自身が設定する指標がほとんど認められない三世紀の列島中央部を初期国家段階とみなしたり、首長制社会→初期国家→成熟国家の変遷を、あたかも指標が制度化・増幅化・固定化してゆく必然的過程であるかのように描きだす限界も生じているのではないか。

これと関連して第二に、日本列島の国家形成過程を長期的にとらえる必要性を説きながら、実際の分析が四世紀と五世紀に偏っていることも問題である。そのために、初期国家の生成経緯および成熟国家への変容過程も、前方後円墳体制が律令体制へと移行

する過程も今一つ不明瞭になっている。とくに五世紀以降は、「雄略大王」「継体大王」など文献史の成果を安易に使用するために、考古学的な追究が手薄になっている感は否めない。具体例を一つあげれば、これまで家父長層ないし村落首長として六世紀以降に出現したとされてきた中間層が、三世紀にはすでに析出されていたという重大な指摘をしつつも、その成長・変容過程を追跡しないため、当該期の階級関係は不分明にとどまっているのである。

そして第三に、日本列島の全域的状況に分析の焦点をあわせるため、地域性の検討がなおざりにされている点を指摘したい。竪穴式石室の分析をつうじ地域性の抽出に努めていた（第一三章）八〇年代半ば以降、とりわけ前方後円墳体制を唱道して以降、地域性の視点の減退は明白である。前方後円墳体制下における諸地域首長の「相互承認」が繰り返し述べられるものの、その具体的内容について言及されることはなく、実質的には大王権力による諸地域への政治的拡充過程が描きだされているにすぎないように感じられるのである。評者は、国家形成過程をよりダイナミックに構築するためには、中心性と地域性とを統一的に説明しうる枠組みを提示する必要があると考える。共同体から離脱した上位首長層と在地性の強い小首長層の併存現象という先駆的な観点（第八章）や第十三章の内容は、そうした枠組みを形成する重要な視点になりうると考えられるので、向後の議論の深化を期待したい。

第四に、諸学問分野の提携を繰り返し強調するわりに、具体的な検討が乏しいことにやや物足りなさを感じた。日本文化論をめぐり、考古学の成果を駆使して民俗学・歴史学の見解を豊かに発展させうることを鮮やかに説く（第二四章）一方、民族や古墳時代の政治関係などについては、諸学問分野の協調を提言するにとどまっている。提言自体に意義があるとは思うが、しかしたとえば、墳墓祭式の本来的な保守性と政治性の帯びやすさを、前方後円墳体制の政治性を主張する根拠として重視するのであれば、データの蓄積のある他分野の研究成果を参照すべきではないだろうか。④

第五に、本書で使用される実年代について気になった点がある。近年の新知見を反映して、本書では旧稿の実年代を改めており、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、半世紀前後の引きあげがなされてれる。しかし、論拠をほとんど変えずに実年代だけが変換される（第一五章等）一方、対応させている文献史上の事象は旧稿のままである。半世紀前後の変動があるにもかかわらず、考古学のデータと文献史上の事象との整合性が保たれているようにみえることは、考古学の成果と文献史学の成果との総合がなお前途遼遠であることを、はからずも露呈させてしまっているのではあるまいか。

以上、いくつかの瑕瑾を示したが、これらによって本書の価値が下がることは断じてない。近年、著者の見解に対しては多くの批判も提示されているが、著者が積極的に実行してきたように、他説との議論を重ねてこそ、本書の内容はさらに深まることになるであろうし、それにより、理論的枠組みに裏づけられない空疎な議論のために混迷する近年の古墳時代研究に、打開の途が拓けると信じている。

六

以上、著者の意を十分にくみとれなかった憾みがあるが、最後に一つ。評者は本書を初めて手にした際、表題に「前方後円墳体制」「初期国家」「比較考古学」などのキーワードがふくまれぬことに、いささかの違和感をもった。だが、本書を幾度となく通読した今、前方後円墳と古墳時代社会との関係のみならず、それらを追究する研究者と現代社会とのかかわり、そして諸学問分野間の連携などの必要性を強調する本書の表題が『前方後円墳と社会』であるのは、まことに適切な選択であると感じている。若き日の著者が、暗唱するまでに読み返したという森本六爾の「手帖」[5]（第二二章）には、「遺物遺跡自体の間に認められる空間的な深淵と時間的な深淵、それを眺める研究者との間の深淵、それを見つめる研究者相互の間の深淵」に対する自覚が綴られている。そうした深淵に橋を架け渡すべく、考古学と社会との関係を見据えつつ、多様な研究成果を諸分野横断的に総合してきた著者の長年にわたる探究の結晶こそ、まさに本書であるように思う。

① 都出比呂志『王陵の考古学』（岩波新書、二〇〇〇年）
② 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店、一九八九年）
③ 都出比呂志「農業共同体と首長権」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座 日本史』第一巻 古代国家、財団法人東京大学出版会、一九七〇年）
④ たとえば、世界諸地域の埋葬方式を渉猟した人類学者クローバーの古典的研究では、死者へのとりあつかいはきわめて変化しやすいと説かれている（Kroeber, A. L., 'Disposal of the Dead', *American Anthropologist* 29, 1927）。
⑤ 森本六爾「手帖」（『日本考古学研究』桑名文星堂、一九四三年、初出は一九三五年）

（A5判　七六六頁　索引二〇頁　二〇〇五年九月
塙書房　本体一八〇〇〇円＋税）